私の家族は沖縄人

ジリコ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
私の家族は沖縄人

【Ｎコード】
Ｎ６４６３Ｄ

【作者名】
ジリコ

【あらすじ】
沖縄に暮らす一つの家族のドキュメント。片親で育った女の子の、シュールで心温まるお話です。貧乏だけど、「私って幸せだな～」と家族の愛を実感しながら生きている、ピュアでバカ正直な女の子の思い出を沖縄の方言を交えながら綴りました。

父の日

６月の下旬、梅雨の時期も過ぎる頃。
沖縄の片田舎をテリトリーにする一つの家族は、この時期暑さにうなりをあげる。
「ハッサ、熱くて死にそうサァ」
「家の中にいたら暑苦しいから外行け、外！」
「暑い暑い言わんで、よけい暑い！」
「ちょっと、テレビの音が聞こえん！」
噛み合わない会話、野球に例えるなら、皆が皆ピッチャーをこなし、いつでも本気で相手に直球を投げつける。祖母・母・兄、この３人が私の愛する家族である。この中にストライクゾーンを持ち合わせる心の広い人間はいない。

さて、今日は『父の日』である。
国のイベントの中で私達４人には最高に無縁の行事だ。
何せ祖母の父はすでに戦死、母の父は海の中を泳ぎ続けて３０余年。私の父はアメリカの地でハッピーライフを送っているので、生まれてこのかた父の日というのは無縁の私達であり、「母の日良けれど父の日けむし」なのです。
取って付けたようで未だに影の薄い父の日、それでもやはり国の行事であるので、その管理下に置かれる教育施設、つまり学校という場所では、この日はとても大事な日であるのです。

小学校２年生だった私は、今日もいつも通り遅刻寸前で教室に駆け込み、いつも通り担任の先生から褒美のゲンコツを頂戴した。そして大好きなお絵かきの時間、先生が「今日は父の日なのでお父さんの似顔絵を描いてください」というのである。
はて？父の顔を知らない私。早速はりきっておばあちゃんの絵を描

いた。気合を込めてそれはもうそっくりに。
すると、隣からムンクの叫びに似た父の絵を描いていたA子ちゃんが、私に声をかけてきた。
「それは、お父さんじゃないでしょう？」
見て分かるように大好きなおばあちゃんの絵だが何か問題でも？という視線を送っていると、
「どうして？死んじゃったの？」
子供というのはどうして、こうデリカシーに欠けるのか。その言葉の超速球ぶりは、いつもドキドキ、ひやひやスリリングものである。取りあえず、私の父はまだ死んではいなかったので、そこんとこはっきりと説明してあげた。
「死んでないけど、アメリカにいるから会った事がないの」
するとA子ちゃん、何やら不思議な事を言った。
「離婚したの？」
リコンって何だ？A子ちゃんに分かって私に分からない言葉。さてそれは何でしょう？と、まるでナゾナゾゲーム。
　我が家への帰り道「リコン、リコン」頭の中はそれだけでいっぱいいっぱいで、日課の自動販売機小銭チェックも忘れて家路を急いだ。
「お帰り、早かったね」
母がお出迎え。ついでだし聞いてみた。
「リコンって何？」
目ん玉ギョロリ、今までにない形相をした母の顔がいたいけな少女の私に向けられた。「何で？」と聞く母の問いに、A子ちゃんから出題されたナゾナゾの事を詳しく話すと、「話は分かったから」と母は私を部屋に呼び、長々と語り始めた。
リコンの本当の意味、喧嘩別れではなくお互いに譲れぬ事情があって仕方なく別々に暮らすに至ったこと等。
そして、古いボストンバッグを取り出し見せてくれたのは、私と兄の出生証や手形、パパが描いてくれた私の似顔絵などの思い出の品

々だった。
「パパと二人で約束したの、お互い恋人が出来ても子供はお前達だけで充分だよなって」
今日もポカポカ、顔テカテカの良いお天気です。
「私って幸せだなァ～」
と感じた瞬間であった。めでたし、めでたし。

父の日（後書き）

所々で沖縄の方言や、言葉の言い回しが入っていますので、読みづらい点もあるかも知れませんが、雰囲気を伝える為にあえてそのままに書かせてもらいました。ご了承下さい。
言葉の意味や沖縄の常識などに関して質問などありましたら、受付致しております。

第2話：通信簿と誕生日

ぽかぽか良いお天気で春うらら。の今日は3学期最後の終業式。
小学3年生だった私は終業式を終え、ランドセルと2つの手さげカバンをこれでもかと膨らませて帰り支度をしていた。
「春休みに入る前に教材は持って帰るように言ったでしょ！！」
と担任の先生が異様に声を張り上げていたが、そんなの知ったことじゃあない！何せ明日から春休み第1日目を迎えるのだ。

肩に荷物を食い込ませ、うんせうんせと家路を歩いていると、後ろから兄がランドセル一つで私をヒョイと抜き去った。
「ちょっと待ったー！」
「無理」
え”ーーー
兄への嘆願はあっけなく砕け散り、澄ました顔で私の前をサクサクと歩いていく。
家に着くと、母がお出迎え。
「はい、通信簿は？」
その声にたじろぐ私をよそに、学校から持たされた通信簿を兄が母に渡した。
「おお～、さすがだね～」
横から覗くとキャー眩しいオール5の通信簿。
クラスでもなかなかお目にかかれないその眩しい通信簿は、毎年のように我が家に届けられている。
「あんたは？」
「無い」
「無いわけないだろー！」と私の荷物を家族3人がかりで探してくれて、掘り出された私の通信簿が公開された。
「お！図工が4になっているね！」

えへ。　何かと良い所を探しては母は私を褒めてくれる。
だけどね、母、図工の時間に提出したからくり箱、実はお兄ちゃんが作ったの。これ内緒♪

さて、次の日。休み第一日目から早速友達とエンジョイして夕方に家に帰ると、おばあちゃんが、テレビを凝視中。
「お母さんは？」
「居るように見えるか？」
おお、いつもながら簡潔で分かり易いお答え。
「お前、今日誕生日だよな」
お兄ちゃんが声をかけてきた。
！？そうだ！！今日はマイバースデイだった！やばい、すっかり忘れていた。
時計を見るとすでに２０時を回っている。そうだ、思い出した。去年の１２月、兄の誕生日会の時「お前の誕生日ケーキも大きいの買ってくるからね」と母が私に言っていた。
ウキウキわくわく、ドキドキドキドキ・・・

・・・再度時計を確認。針は２２時を指して終わったところだ。
う～ん・・来ないねぇ母。
家族３人がしびれを切らしていた頃、ようやく母が自慢の真っ赤に輝く軽自動車に乗って帰ってきた。
！！「お帰りーー！」
黄色いを通り越して超黄色い声援で母を迎えた。
しかし、母の手には荷物らしきものと言えば、近所の商店の買い物袋一つしかないようで。
「ただ今帰りましたよっこらせ」と入ってきた母は少し酒臭い。
か細い心臓が震える。まさか？一応聞いてみた。
「今日何の日か知ってる？」
「もっちろーん」

と買い物袋から取り出し見せてくれたのは、りんごパン。まさかのあのりんごパン。
確かにケーキと同じ丸い形をしているけど。
それから母は自分のポケットからライターと3本のローソクを取り出し、あのりんごパンにぶっ刺し歌い出した。
「ハッピィバースデイ　Ｔｏ　ｙｏｕ～♪」

え”ーーー　え”ーーーーー！！

その後、私は祖母と兄に慰められるも、立ち直るのに長い時間を必要とされた。
「私って幸せよね？」
疑問に感じた年であった。めでたし、めでたし？

第3話：我が家のおばあちゃん

7月、今日も太陽はぎらぎらギンギン中学生になった私を焦がしてくれる。
「あんせ、暑さよ！」
内輪をばたばた、扇風機超強風で、我が家のおばあちゃんはいつも同じセリフ。
「じゃあクーラー買えば？」
すかさず私が突っ込むと、
「どっからそんなお金持ってくるね！」
確かに、我が家の大黒柱は母親一人。なので私も、自分のこづかいは自分でと、夏休みの間近所の畑でアルバイトを始めたのだが・・・
「ダァ～、あんたのバイト代で買おう」
ばあちゃんの思わぬ言葉にハッとする。
「あ！宿題しないと」
そそくさと自分の部屋に戻る私。
「宿題なんてしたことないくせに。フラーグワァ～」
ドアの向こうでヤジが飛んでいるのを横耳で聞きつつ、猫のミーコとイチャイチャ。ミーコとのラブモードにも飽きだした頃、
「グ～・・・」
今度はお腹の虫が鳴いた。
ガチャ・
「おばあ、お腹空いた」
「ハッセ、自分で作れ」
はいはい、いつもそうです。自分のことは自分でね。
冷蔵庫を開けると、何と野菜がない！ていうか何もない。からっぽである。
「おばあ、何もないけど」
「はあ？じゃあ畑で野菜取って来い！」

家の庭には、小さな畑がある。ほうれん草にかぼちゃ、芋、きゅうり、にがうりにプチトマトなど等。数は少ないが、いろいろな野菜が季節ごとに実っている。

しょうがないなと、スリッパを履いて庭に出た私。しかし！！レタスを取りに行こうと、畑に足を踏み入れたその時、私の目の前に大きなクモが！

「うぎゃー！？」

失神寸前になりながら絶叫したが、クモはびくともしない。蛇もけむしも何でも来いの私だが、どうしても駄目なものは唯一このクモの存在である。

南国沖縄のクモは、それはそれはデカイ。手の平サイズなんて裕に越している。私のキャシャな手の平の2倍はあるのではないかとビビッてしまうそのクモは、グロテスクに光って、毎年我が家の一本松にその姿を現す。そして今、大きな手足を伸ばして、私が巣に引っかかるのを今か今かと待ち伏せているではないか。

「よっこらせ。何ね？今の声は」

さっきまでテレビに夢中だったおばあちゃんがとことこ歩いてきた。

「ハッサビロイ、クモは何もしないよ」

そう言いながら、クモの下をくぐり抜けレタスのなる畑に入っていった。

いつも思うのだが、どうして年寄りはこんなに肝が据わっているのだろうか。何よりもクモの巣に引っかかる所を見たこともない。私なんて、しょっちゅう引っかかって死ぬ思いなのに。

「うり、これ洗ってから食べれ」

クモの巣をくぐって出てきたおばあちゃんから、腕いっぱいのレタスを手にとって、キッチンに戻った。

グチャグチャとレタスを手でもみもみ、お酢と醤油とツナを混ぜ合わせて出来上がり！

「おばあ、出来たよ。食べるか？」

ボールごとテーブルに持っていくと、
「おばあ、歯が痛いからいいよ」
そう、おばあちゃんの苦手なもの、それは歯医者さん。
「だから行けって言ってるのに」
「ううん」
この話をするといつも黙りこくってしまうのだ。
むしゃむしゃとボールごとレタスを食べ終えて、しばらくおばあちゃんと二人でテレビに見入っていると、
「郵便だよ」
ガラガラと郵便屋さんが入って来た。
「お茶飲んでいくねぇ？」
「ううん、さっきアガリグワァーの所で飲んできた。ありがとうね」
そう言って、手紙を置いて郵便屋さんが出て行くと、待ってましたとばかりの素早さで、おばあちゃんが手紙を開けだした。
「あい、町子からさぁ」
町子とは私の叔母にあたる人で、おばあちゃんの2番目の娘である。
封筒の中には、幾つかの子供の写真と一枚の手紙。
「あんなに大きくなって」
東京で暮らす孫の写真を見てはしゃぐおばあちゃん。その横で、同じ孫としてちょっと嫉妬心に駆られる私。

ソファに戻ってまたテレビを見始めていると、
「カアー」
カラスの鳴き声と一緒に夕日が落ち始め、カーテン全開の我が家に陽が差し込んできた。ジリジリジリ、夕陽が私を焦がしている。
沖縄では、昼間の真っ赤に燃える太陽も熱いが、夕陽もまた熱いのなんの。
「そろそろ、お母さんとお兄ちゃんも帰ってくるんじゃないねえ」
カーテンを閉めながら、おばあちゃんが独り言のように言った。

ころころしていて、愛想のかけらもない我が家の小さなおばあちゃん。庭に暮らす犬の山ちゃんと一緒に、毎日この家の平和を守っている。どうか長生きして、いつまでも憎まれ口を言っていて欲しいものだ。

しみじみ想う13の夏であった。

「何か言ったねぇ？」

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6463d/

私の家族は沖縄人

2010年10月28日08時45分発行